ディネーセン・コレクション④

復讐には天使の優しさを

アイザック・ディネーセン

横山貞子訳

晶文社

著者について

アイザック・ディネーセン

一八八五―一九六二。二十世紀最大の作家の一人として、今日その声価はとみに高まっている。デンマークの名家ディネーセン家に生まれ、スウェーデンの貴族ブロル・ブリクセンと結婚、ブリクセン男爵夫人となる。一九一四年、ブロルと共にアフリカに渡り、ケニアで広大なコーヒー園を経営、ついにアフリカを去り行く日まで、十八年間を農園の女王人として生きた。三四年にアメリカで、『七つのゴシック物語』をアイザック・ディネーセンという男名で発表するや、忽ち謎の作家として注目を浴びた。自伝文学の最高傑作と謳われるに至った『アフリカの日々』をはじめ『冬物語』『運命譚』など、数々の秀作を残している。

訳者について

横山貞子（よこやま・さだこ）

一九三一年生。五六年慶応義塾大学大学院英文科修士課程修了。現在、京都精華大学短期大学部教員

著書―『日用品としての芸術』（晶文社）ほか

訳書―ディネーセン『アフリカの日々』『夢みる人びと―七つのゴシック物語1』（以上、晶文社）、デヴリエス『メキシコ・わが大地』（研究社）ほか。

ディネーセン・コレクション❹

復讐には天使の優しさを

一九八一年一二月一五日発行

著者　アイザック・ディネーセン

訳者　横山貞子

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ディネーセン・コレクション④

復讐には天使の優しさを

アイザック・ディネーセン

横山貞子訳

晶文社

晶文社　定価2000円　0397-1334-3091

復讐には天使の優しさを

アイザック・ディネーセン

横山貞子訳

ディネーセン・コレクション④

晶文社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Isak Dinesen:
GENGÆLDELSENS VEJE
First Published in 1944
by Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag, Copenhagen
Japanese Copyright © 1981
by Shobun-sha Publisher, Tokyo

復讐には天使の優しさを＝目次

第一部　薔薇咲く道と茨の径
1　孤独な娘　12
2　ルーカンの決意　18
3　夜の語らい　24
4　逃亡　30
5　道連れ　36
6　ゾジーヌ　44
7　薇薔色のドレス　51
8　ゾジーヌの誕生祝賀会　58
9　奇妙なパートナー　65
10　夜明けの語らい　71
11　タバナー氏をしのぶ　78
12　廃墟のうえで　88
13　アラベラ叔母さんの手紙　96
14　世間を敵として　103
15　ペンハロウ牧師　111
第二部　籠のカナリア
1　フランスの農園　122
2　新しい暮し　129

3 クロン 136
4 マゼッパ 143
5 ペンハロウ夫人のいましめ 150
6 昔の教え子 157
7 魂を売りわたす 163
8 月明かりのなかで 170
9 恋がたき? 179
10 ペンハロウ牧師の教訓 185
11 警察の手が 191
12 告発 198
13 抗弁 204
14 免訴 211
15 危機は去って 219
16 深夜の語らい 228
17 ローザ 238
18 緑の絹糸 244
19 ゾジーヌの決心 251

第三部 埋もれた宝

1 仮面 260

2 ヴァディエ神父 268
3 ペンハロウ牧師が旅に出る 275
4 私のボネットはどこへ？ 282
5 夜の訪問者 288
6 思いがけぬ味方 294
7 ふたたびアラベラ叔母さんの手紙 300
8 綱と斧と 307
9 オリンピア再登場 315
10 イギリスからの消息 323
11 ペンハロウ牧師の帰宅 332
12 また綱を 337
13 二つの手紙 346
14 ジョリエ城 354
15 ド・ヴァルフォン夫人思い出を語る 360
16 サン・バルブ事件落着 368
17 信じられない 376
18 別れゆく人びと 385

「牢獄に閉じこめられていながら、自分たちは囚人だとはっきり言うことさえ許されない人たちが、なにかのたのしみを求めるのは人間として当然のことよ。まじめな人たちも、そこまでとがめだてしてはいけないわ。今の今、すこしはたのしみがなくては、私、生きてゆけないの。」

一四九ページ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン　平野甲賀

第一部　薔薇咲く道と茨の径（こみち）

1　孤独な娘

それは春の夕暮れ、場所はイギリスの田舎の大邸宅。若い娘がひとり、窓辺に坐ってもの思いに沈んでいた。娘の名はルーカン・ベレンデン。一八四〇年代の流行で、ゆたかな金髪は長い巻き毛をなして頸から肩へと垂れている。身につけた黒い服は娘の美しい胸と腕をぴったり覆っているが、ほそい腰から下はたっぷりしたひだが拡がっている。ときたま娘の指がスカートのひだをまさぐったり、にぎりしめたりする。動作といえばそれだけで、あとはまったく身じろぎもしない。

ルーカンはみなし子で、つらい境遇に置かれていた。子供のころ母をなくし、一年まえに父に死なれて一家は離散し、二人の弟たちはそれぞれ親戚のところに引きとられていった。ルーカンも自活の道をさがさなければならなくなった。まず金持ちの老婦人のお付きとして何カ月かつとめた。若いころは美女として名の高かった人である。白髪や禿げ頭の色男たちが、トランプのホイストの勝負やパ

ンチを注いだグラスをそっちのけにして、ルーカンの若々しく美しい顔や姿に見とれているのに気づくと、この老婦人はいまだに激しい嫉妬の火花を散らす。豪華な邸に暮していても、ルーカンは孤独だった。そこには人間はひとりもいない気がするし、籠のなかのオウムも、絹張りのひじかけ椅子や長椅子も、どれひとつとしてやさしい顔を示してはくれない。だがルーカンには若さがあった。ひとりぼっちで気が滅入っても、心の底には決してくじけない信念を持ちつづけていた。世界のどこかで、なにか美しくて幸せなことが私を待っていてくれるにちがいない。「いまにきっとよくなるわ」と、ルーカンは思っていた。老いた雇い主が卒中で急死すると、ルーカンはロンドンの職業紹介所に出かけた。そこで、いま居るこの邸の家庭教師の職を斡旋してもらったのである。

ここのあるじは事業家で、仕事も順調にはこび、世間の尊敬をうけている紳士だった。堂々と誇りたかいが、控えめで口数がすくない。やもめで娘二人と息子が一人いる。妻は莫大な持参金をもってとついできたが、体が弱く病気がちで、子供を産むたびに生死の境いをさまよった。ところが夫のアームワージー氏がなににも増して望んだのは、自分が創設した大会社を受けついで経営してゆける男の子の誕生だった。生まれた子供が二人とも、たてつづけに女の子だったのは、父親にとってつらいことだった。何年もヨーロッパ各地に転地旅行をかさね、あちこちの温泉で治療をうけたあげく、妻はとうとう待ちに待った男の子を産んだが、その代りに命を失った。妻の死よりもさらに苦しい不幸が孤独な夫におそいかかった。愛らしい男の子は盲目だということが、やがてわかったのである。父親はだんだんに人との交際から身を引き、事業に没頭するようになった。田舎の荘園「フェアヒル」にきて子供たちに会うのはごくまれで、滞在もわずか一日、二日にかぎられていた。

ルーカンの父は科学者で、才能ゆたかな植物学者だった。時代をはるかに先んじていたために、か

えって認められず、宗教界の一部からは強い反感を買っていた。フランスやドイツの科学者のなかに友人が多く、そのひとり、フランスのブレイユ博士は、盲人用の点字を発明した人である。この名高い学者が父をたずねてきたときにルーカンも同席し、点字という着想をいろいろ話してくれるのを聞いたことがあった。こういう縁で点字技術をいくらか身につけていたので、ルーカンは大勢の応募者のなかから選ばれて、アームワージー家の子供たちの家庭教師になることができた。ルーカンはこの幸運を、心ひそかに父に感謝した。父のやさしい眼がいまもなお、自分を見守ってくれている思いがした。

男の子はまだ点字をおぼえるには幼なすぎた。だがルーカンは一緒に遊んだり、短い歌や詩を教えたりした。そのうち、この頭のよい不幸な子供を心からかわいいと思うようになってきた。この子を見ていると、弟たちのことを思いだした。以前の職場は都会だったが、そのときよりもこうして田舎にいるほうが、のびのびとして心が明かるい。内庭も外庭も霜で真白になる冬のあいだも、ルーカンは子供たちを連れて毎日かかさず散歩に出ては、風景の美しさをたのしんだ。父が死んでこのかた初めて、ここでは笑ったり遊んだりすることができた。今はもう夏が近い。夏がきたら、長いこと待ち望んでいた幸せが、自分にとって開けるのではないだろうか。これからは一日ごとに、ルーカンのよろこびはますます強く、すばらしいものになってゆくことだろう。

子供たちの父親は、自分の家庭教師としての仕事ぶりと、生徒たちへの愛情の深さを認めている。ルーカンにはそれがわかっていた。息子の将来について、ルーカンはこれまで一、二度相談をうけたことがある。これはまぎれもなく、ルーカンへの信用を物語っていた。というのは、ルーカンがこの家に着くとすぐに、家事取締り役の老女から注意をうけた。旦那様は決して坊ちゃまの将来のことに

触れてほしくないのですから、その話題は避けて下さいよ、と言われたのだ。亡き父とほぼ同年配で、自分よりもはるかに賢く、人生体験ゆたかな人物が、自分の取るにたらない観察や意見に耳をかたむけてくれたとき、だからルーカンはおどろきもし、なんだか偉くなったような気もしたのだった。アームワージー氏にほほえみかけられると、かすかな当惑のまじった同情がルーカンの全身に走った。そのほほえみはいかにもぎこちなく、かたくるしいのだ。このかたはもうずっと前から、ほほえみを忘れていたのだわ、とルーカンは思った。

この父親は以前にくらべて子供たちのためにつとめて時間をつくり、関心をもつようになってきていた。先月など二度もやってきて、しかも滞在の予定を一日二日と延期したのである。暖くなると、アームワージー氏は息子と家庭教師を連れて馬車で遠乗りに出かけた。このあたりには広い庭にかこまれた立派な邸がいくつもあった。見事な二頭の馬に引かせた乗りごこちのよい馬車で出かけるなど、ルーカンは生まれてはじめてだった。父から教えられて植物や花にくわしいルーカンは、フェアヒル一帯の土地と、あたりの美しい風景が、やがて緑に包まれ、花咲く日を待ちかねた。散歩や遠乗りのとき、なによりも大好きな野の花々を見つけられる日を。

先週の土曜日、アームワージー氏は例になく早い時間に着き、幼い息子を客間に呼びよせた。そして一時間ばかり、子供の熱をこめた話に忍耐づよくつきあった。子供はこの一週間、家庭教師と一緒にしたことをあれこれ話し、新しくおぼえた歌を、ルーカンのピアノの伴奏で歌ってきかせた。

乳母がきて息子を子供部屋へ連れ去ると、アームワージー氏は若い家庭教師に、しばらく話相手になってほしいと頼んだ。そして家庭の事情や子供のころのことをたずねはじめた。十四歳のとき寄宿学校から呼びかえされて、母の死を見送ったこと、それ以来父のために家政をとり、父の不運をなぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com